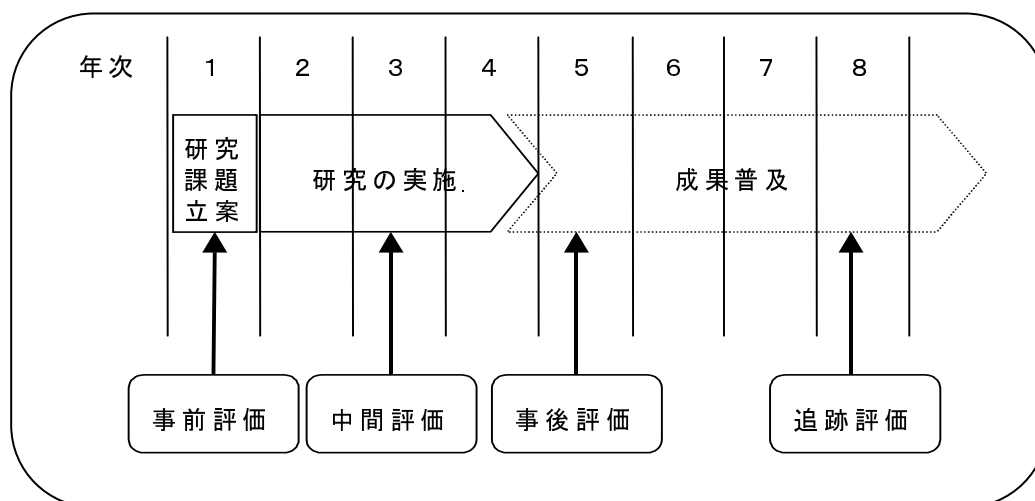


平成 2 1 年度追跡評価結果

研究開発を行った場合、その成果が社会・経済などにどのような影響を与えたかが最も重要になってきます。また、一般に研究の成果が社会に普及するには一定の期間が必要となります。

このため、総合技術研究所では、研究終了後 3 年を経過した時点で、研究成果の活用状況や波及効果等について、追跡評価を行っており、県民への説明責任を果たすとともに、研究開発の企画・立案機能の強化や成果移転などの効果的な推進に活用しています。

評価時期のイメージ図



【評価結果概要】

平成 2 1 年度は、平成 1 7 年度に終了した 2 9 課題を実施し、結果は次のとおりでした。

評価区分	内 容	課題数
S	研究成果が十分に活用され、効果は当初見込みを上回っていると認められる。	2
A	研究成果が活用され、効果は当初見込みをやや上回っていると認められる。	3
B	研究成果が活用され、効果は当初見込みどおりであると認められる。	8
C	研究成果の活用が不十分で、効果は当初見込みをやや下回っていると認められる。	1 6
D	研究成果の活用が不十分で、効果は当初見込みを下回ると認められる。	0
計		2 9

また、総合評価において、研究成果が活用され、効果が当初見込みどおり若しくは上回っていると認められた研究成果の活用状況は、次の 1 3 課題です。

総合 評価 結果	センター	課 題 名	成果の活用状況	研究 期間 (年度)
S	食品C	県産農産物・微生物等の有する生体調節機能の評価と機能性食品の開発	県産農産物等に含まれる抗糖尿病機能等を有する成分の検索を行い、企業と連携して機能性食品等の開発を行いました。また、「凍結含浸法」を開発して多数の企業へ特許実施許諾を行っています。	H15-17
	西部C	ビジョンシステムの実用化に関する研究開発	画像処理IPを活用して、生産ラインでの検査を可能とする画像処理システムを開発しました。これまでに、企業13社に画像IPの有償配布を行いました。また、米の胴割れ選別を高速に処理判定できる全粒選別機を製品化できました。	H15-17
A	畜技C	広島牛における遺伝子型を活用した育種手法の確立	500頭の広島牛の遺伝子解析を実施し、脂肪交雑、枝肉重量などを高める優良遺伝子型を見つけ、遺伝的能力の高い種雄牛を選抜する基準として活用できるようになりました。	H13-17
	水技C	広島かき新ブランド構築技術開発研究事業	3倍体かき稚貝を生分解性ビニールシートに付着させ、一粒かき種苗にする技術を開発しました。技術移転先の県栽培漁業協会では、3倍体の一粒かき種苗を年70万個配布できるようになりました。	H15-17
	水技C	ヒラメのウイルス性表皮増生症防除研究	ヒラメのウイルス性表皮増生症の迅速な検出方法及び紫外線照射によるウイルス殺菌技術を開発しました。本技術の移転により、平成18年度以降、本ウイルス疾病は発生していません。	H15-17
B	保環C	アレルギー食品及び遺伝子組換え食品に関する調査研究	アレルギー食品及び遺伝子組換え食品の検査法の改良を行い、行政検査に活用しました。また、本研究成果が厚生労働科学研究への参画につながりました。	H15-17
	西部C	無機層状化合物を用いた水素製造触媒の開発	比表面積を改善した水素製造用ニッケル触媒の実用化展開を図り、2万時間の耐久性を実証できました。技術移転先企業は、開発した触媒の燃料電池実機搭載を目指し、家電メーカーと共同開発中です。	H16-17
	西部C	ナノ粒子及び機能性材料の解析技術開発	機能性材料の原料となるナノ粒子の結晶構造、組成及び化学結合状態を透過電子顕微鏡で解析する技術を開発しました。本技術により、自動車用触媒、医薬品やナノ粒子関連産業の製品開発を支援しました。	H14-17
	農技C	光質制御によるワケギの夏季安定生産技術の確立	ワケギの初夏・夏どり栽培において、りん茎の肥大抑制技術を開発し、技術移転により収量・品質が向上しました。また、初夏どり栽培用の種球を肥大充実させるため、電照栽培技術を確立し、良質種球を供給できるようになりました。	H14-17
	農技C	高香気性および晩抽性ヒロシマナの育成	秋作の広島菜の新品種「CR広島2号」を育成し、県内種苗業者との品種利用許諾契約締結により普及が進んでいます。また、春作において在来系統に比べ約1週間抽苔が遅い「晩抽広島3号」を育成し、県内種苗業者が品種利用許諾契約締結を検討しています。	H13-17
	農技C	大粒系ブドウ（安芸クイーン等）の不発芽解消技術の確立	4倍体大粒系ブドウ品種の不発芽解消技術及び好適結果母枝育成技術を開発しました。収量向上技術として、県内ブドウ産地におおむね普及しています。	H15-17
	林技C	森林バイオマスの効率的供給システムの開発	「高性能林業機械」と「列状伐採」を導入した場合の搬出材積と供給コストの損益分岐点を計算しました。森林バイオマス発電施設を建設した企業がこの損益分岐点を目安として使用しております。また、機械メーカーが林地残材を収集・運搬するマシンを商品化しました。	H16-17
	林技C	熱圧成型によるスギ材面加工技術の開発	スギ材の圧密度を変化させることで材料強度をカシ以上にさせる技術や、スギ材に染料を注入し、着色させる技術を開発しました。技術移転先企業により、間伐材を利用したエコ商品（マウスパッド）が製品化されました。	H13-17